

『関西大学百年史』の編纂を振り返って（一）

——「十年仕事」の来し方行く末——

熊 博 毅

「Louis Vitton——これって、もしかして、あのルイ・ヴィトン？」

このひとことが、百年前に生きた一人の人間の輪郭を、より現実味を帯びて浮かび上がらせるきっかけになった。

昭和六十年の晩秋、関西大学は創立者の一人であり、初代の校長であった小倉久の遺族・稲子さん（久の長男、揆一の夫人）から、彼が生前に愛用した品々の寄贈を受けた。掛軸やアルバム、短刀など、年史資料編集室に運び込まれた遺品は十六点にのぼったが、その中で、ひときわ異彩を放っていたのが大きな木製の旅行トランクで

あった。

それはほとんど「つづら」と呼んでもおかしくないほどのもので、堅牢な留め金具や革のベルト、二段になった小物入れの存在などから、かなり上質のものであることは予想できたが、外観からこのトランクの製造元などをうかがい知ることはできなかった。それが分かったのは、革のベルトを外し、蓋を開け、小物入れを取り除いて製造番号の入ったラベルを見た時である。

「Louis Vitton PARIS No.10856」。

小倉がフランスに留学していたことは、すでに分かつ



小倉久が愛用した思い出の遺品

ていた。そのため、「ルイ・ヴィトン」のトランクを持
つていても何ら不思議ではなかったが、目の前にある古
びた大型のトランクと、高級ブランド品として有名な
「ルイ・ヴィトン」とを結びつけるのにはちよつとした
努力が必要だった。

そこで半信半疑ながらも、とりあえずルイ・ヴィトン
社に問い合わせてみることになったが、たとえばそれが
「ルイ・ヴィトン」だとしても、百年前に販売した品物

のことなど分かるはずがないというのも、その時の偽ら
ざる気持ちであつた。しかし、ルイ・ヴィトン ジャパ
ンからパリの本社に照会してもらつた結果、意外な事実
が判明してきた。

まず驚いたのは、ルイ・ヴィトン本社には当時の顧客
台帳が存在し、関係するデータが残っていたことである。
それによると、このトランクは次のような経過で製造・
販売されていた。

〔製造年〕一八七二（明治五）年

〔販売年月日〕一八八四（明治十七）年九月二日

〔購入時の価格〕一九〇一年の価格表によれば、千八

百フラン

また、「購入者の名前」については当初、顧客のプラ
イバシーを守るといふ理由から教えてもらえなかったが、
購入者の遺族の了解を得ていると説明した結果、小倉久
であるとの確認も得ることができた。日本人としては一
八八三年の後藤象二郎に次ぐ二番目のルイ・ヴィトンユ
ーザーであることまで分かつたのである。

嘉永五（一八五二）年、上州沼田藩士小倉久彝（ひきつね）の長男として江戸に生まれた久は明治三年、大学南校に入学し、五年に司法省法学校へ移った。司法省法学校では、政府が招いたフランス人法学者ボアソナードの直弟子としてフランス法の修得に努め、九年、卒業と同時にボアソナードの強い推薦によりフランスへ留学、当時フランス法学の最高權威だったアコラスに師事した。彼の地では、勉学の傍ら、同じくアコラスの教えを受けていた西園寺公望とパリの社交界で華やかな遊興に投じたとも伝えられている。明治十二年に帰国してからは、司法省に入って法学校の講師を務めるとともに民法典の編纂にもあたったが、十四年に突如、官を辞している。大日本帝国憲法草案にプロシャ法を取り入れようとする政府部内での動きが退官の原因の一つになったと推測されている。

その後、駅逓官（後年の通信省、現郵政省の官吏）となった小倉は、ポルトガルのリスボンで開催される「万国郵便会議」に出席するため、明治十七年に再びヨーロ

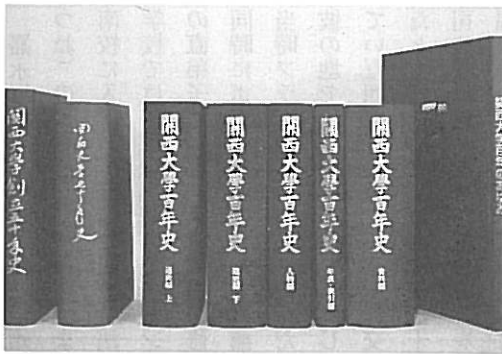
ッパの地を踏んでおり、問題のトランクもこの時に買い求められたと考えられるが、そのころ、パリは史上最高の繁栄を遂げ、フアント・ド・シエクル……世紀末の爛熟に向かおうとしていた。このトランクは、そうした華やかなパリの空気と、おしゃれで社交上手な美男子の果てぬ夢を今でもその中に閉じ込めているように思われる。はるか異国に旅してきたトランクは、見る者にさまざまなロマンをかき立ててくれるのである。

そして、このトランクが持ち込まれた年から『関西大学百年史』の編纂事業も本格化した。それから十年、平成八年三月に編纂作業は「資料編」の刊行をもってすべて終了した。昭和五十七年十一月一日の「関西大学一〇〇年史編纂委員会」設置からはすでに十三年あまりの年月が流れていた。「年史編纂は十年仕事」と言われるが、本学もその例外ではなかったのである。『関西大学百年史』五編六巻の完成にあたり、十三年あまりに及ぶ編纂作業の来し方を振り返るとともに、年史業務の行く末についても少しだけ思いをはせてみたい。

一 編纂組織

既刊の年史

本学は現在までに『関西大学創立五十年史』（昭和十一年刊行）と『関西大学七十年史』（昭和三十二年刊行）、



本学既刊の年史
（左から『五十年史』『七十年史』『百年史』）

『関西大学百年史』（昭和六十一年から平成八年まで逐次刊行）の三巻の年史を刊行している。

『関西大学創立五十年史』の原稿を執筆したのは小泉幸治、飯田正一、両予科教授らで、これに喜多村桂一

郎理事（五十周年記念式典委員長）が修正補綴を加えた。編纂の過程では創立当初に在学した学生の座談会や旧時の講師、校友たちからヒヤリングが行われ、数回におよぶ改稿、十九回にわたる委員会の討議を経て昭和十一年五月一日に刊行された。本文三百五十二ページ、付篇九十八ページ、付図七点の『五十年史』編纂過程で特筆すべきことがらは、それまで明治十九年十二月十三日とされていた関西法律学校の開講日が、前月の十一月四日であつたことが明らかになり、これによって創立記念日が変わされたことである。

『関西大学七十年史』は『五十年史』刊行後二十年間の歴史を追補するだけでなく、創立以来の新史料を発掘し、七十年間を通して内容を一層充実させる点に編纂の主眼が置かれた。とりわけ「創立の事情を詳しく正確に伝えること」「教育の実情と研究活動を詳説すること」「学生生活を詳しく記録すること」の三点に力点を置いて執筆が進められた。原稿は横田健一文学部教授（現名誉教授）が執筆し、藺田香融文学部助手（現教授）と原

英次法学部助手（現教授）がこれを補助した。昭和三十二年十二月に完成した『七十年史』は本文七百ページ、口絵、資料編を加えると九百ページを超える大冊となった。

さらにその後、創立八十周年（昭和四十年）、八十五周年（四十五年）と節目の年に年史の刊行は計画されたが、実現には至らなかった。創立八十周年の時は横田教授が在外研究から帰国直後で執筆できなかったという事情があり、また、八十五周年の時は学園紛争の余熱が強く残っていたからである。結局、『七十年史』のあと『百年史』まで年史は刊行されなかった。

関西大学一〇〇年史編纂委員会と同専門委員会の設置『百年史』の編纂作業は昭和五十七年十一月一日、『関西大学一〇〇年史編纂委員会』が設置されたことから実質的にスタートした。この委員会は、『百年史』編纂・刊行の基本方針ならびに委員会運営に関する重要事項、その他『百年史』編纂に関する事項を審議し、理事

長、副理事長のほかに理事から一名、学長、各学部から選出された委員各一名、年史編纂経験者二名、学識経験者若干名、高校・中学校長（兼任）一名、幼稚園長一名、年史資料編集室長一名（事務組織の改変に伴い昭和六十三年からは企画室長、平成二年からは事業局長）、大学事務局長一名、校友会事務局長一名、教育後援会幹事長一名で構成された。

第一回委員会（昭和五十七年十一月一日開催）では正・副委員長の選出が行われ、委員長に大西昭男学長、副委員長に横田教授が選任された。委員長に学長が選ばれたのは『七十年史』編纂時の委員長が岩崎卯一学長であったという前例に加え、大学は教育と研究を中心に運営されるものであるため、大学史の編纂委員長は学長が適任であるとの認識に基づくものであった。

第二回委員会（昭和五十八年一月三十一日開催）では「関西大学一〇〇年史編纂委員会規程」（案）が審議され、また、「通史編」の大綱も検討された。「通史編上」は『七十年史』をベースとして叙述する方針（収録



第1回100年史編纂委員会（昭和57年11月1日）

範圍は創立の明治十九年から七十周年の昭和三十年まで）が再確認されるとともに、新規書き下ろしとなる「通史編 下」については、部局史的構成を避け、全学を通じて時代順に章編成を行うこと、教学・法人・学生・校友を軸に置き、均衡のとれた記述配分を考慮することなどが説明された。

「関西大学一〇

〇年史編纂委員会
規程」(案)は翌
二月十日の理事会
に上程され、審議
された結果、制定
が決議された。こ
れに基づいて「一
〇〇年史編纂委員
会」のもとに「一
〇〇年史編纂専門
委員会」も設置さ

れた。この専門委員会は、『百年史』の編纂方針(案)および刊行計画の立案ならびに原稿作成、調査・資料収集その他『百年史』編纂に必要な業務を行うとされ、『一〇〇年史編纂委員会』の年史編纂経験者二名と各学部から一名ずつ選出された委員に、若干の学識経験者を加えて構成された(専門委員会の委員長は横田教授、副委員長は藺田教授)。第一回専門委員会は昭和五十八年三月十日に開催され、今後の運営や編纂作業について協議された。『百年史』各編の草稿の校閲や内容の検討等、実質的なチェックは以後、この専門委員会で行われることになる。

事務局スタッフ

昭和五十七年から五十八年にかけて編纂委員会組織が確立されるに伴い、事務局のスタッフも徐々に増員されていった。昭和六十年四月にほぼ体制が整った事務局は、年史資料編集室長一名、年史資料編集室付課長二名、主任一名、主事三名、嘱託三名、定時職員(アルバイト)三名、計十二名の陣容であった。

関西大学一〇〇年史編纂委員会委員一覧（昭和五十七年十一月一日～平成八年三月三十一日）

理事長	副理事長	理事から 一名	学 長	各学部か ら一名
久井 忠雄（昭57・11・1）平3・8・24死去 稲野治兵衛（平3・9・6）平4・7・7死去 上田 繁潔（平4・10・1）平8・3・31	稲野治兵衛（昭57・11・1）平3・9・5	榎本 信雄（昭57・11・1）平2・1・21死去 佐々木砂夫（平2・7・13）平4・9・30 森本靖一郎（平4・10・1）平8・3・31	大西 昭男（昭57・11・1）平6・9・31 石川 啓（平6・10・1）平8・3・31	〔法学部〕 石尾 芳久（昭57・11・1）平4・12・28死去 市川 訓敏（平5・2・13）平8・3・31 〔文学部〕 神堀 忍（昭57・11・1）平8・3・31 〔経済学部〕 津川 正幸（昭57・11・1）平8・3・31 〔商学部〕 高堂 俊彌（昭57・11・1）平8・3・31 〔社会学部〕 上田 達三（昭57・11・1）平8・3・31 〔工学部〕 田中 行雄（昭57・11・1）平5・3・31

年史編纂 経験者	学識経験 者	高校・ 中学校長 （兼任）	幼稚園長	年史資料 編集室長 企画室長 事業局長
横田 健一、藺田 香融 （ともに昭57・11・1）平8・3・31	神屋敷民蔵（昭57・11・1）平6・5・28死去 福田 保朝（昭57・11・1）平6・9・7死去 田中 繁男（昭57・11・1）平8・3・31 東山 利雄（昭57・11・1）平8・3・31	西岡 宸（昭57・11・1）平1・3・31 長尾 宏（平1・4・1）平8・3・31	村尾 能成（昭57・11・1）昭59・3・31 米田（石川）和代（昭59・4・1）平8・3・31	若林 茂信（昭57・11・1）昭60・3・31 村山 弘（昭60・4・1）昭63・3・31 中山 義一（昭63・4・1）平2・3・31 森本靖一郎（平2・4・1）平7・3・31 増地 英一（平7・4・1）平8・3・31

大学事務局長	中山 義一 (昭57・11・1) 昭60・3・31
	福田 秀直 (昭60・4・1) 平4・3・31
	北田 清士 (平4・4・1) 平8・3・31
校友会事務局長	金田 雅一 (昭57・11・1) 平5・3・31
	辻見 重行 (平5・4・1) 平8・3・31
教育後援会幹事長	森本靖一郎 (昭57・11・1) 平7・3・31
	増地 英一 (平7・4・1) 平8・3・31

※ 事務組織の改変に伴い、年史資料編集室長は昭和六十三年から企画室長、平成二年から事業局長に変更

『百年史』編纂の基本方針

「一〇〇年史編纂委員会」が組織される以前から、この次、年史が編纂される場合も編纂の中心になるのは『七十年史』を編纂した横田・藺田両教授であるということは暗黙の了解となっていた。しかし、両教授とも多忙ということに加え、『百年史』が「通史編 上」「通史編 下」「人物編」「年表・索引編」「資料編」「百年のあゆみ(図説)」の五編六巻で構成されることになったため、組織的な編纂方法を確立する必要が生じてきた。その結果、草稿ならびに編集の大枠は、両教授の指導を受

けながら年史資料編集室の方で整え、それを専門委員会が校閲することになった(これは「通史編」だけでなく、「年表・索引編」や「資料編」の編纂においても基本的な編集方針として引き継がれた)。「通史編」の草稿は課長一人と主事三人の四人が分担して執筆し、「人物編」の編集は藺田専門委員会副委員長と神堀委員ならびに主任が、「百年のあゆみ(図説)」の編集は藺田副委員長ともう一人の課長が、それぞれ担当することになったのである。

編纂作業は、委員会ならびに事務局組織の整備と並行してあわただしく進められた。「通史編 上」「人物編」「百年のあゆみ(図説)」の三巻は昭和六十一年十一月の創立百周年記念式典までに完成させるという方針が決定していたため、編集は同時進行させなければならず、期限までに十九か月ほどしか残されていないこともあって、編纂作業は時間との競争となった。

二 「通史編」の編纂

「通史編 上」の草稿執筆

『百年史』の編纂作業をスタートさせるにあたり、「通史編」の記述・編集については次のような基本方針が立てられた。

大学史はとかく経営史に陥りやすいという欠点があるため、できる限り読みやすいものにする。
わが国の近・現代史の研究状況を踏まえ、本学の創立事情等について考察する。
教育の実情と研究活動を詳しく記述する。
学生生活について豊富な記録をとどめる。
できる限り多くの写真を収録する。

そして、この方針に従って昭和六十年六月、四人の担当者（大場義之、狩野吉清、熊博毅、篠原茂一）が「通史編 上」の草稿執筆に取りかかった。しかし、刊行予定日まで一年半ほどしか時間が残されておらず、間に合

うのかどうかということが大きな問題となった。執筆者のうち二人が遠隔地から通勤していたという事情を考慮して、週三日の自宅執筆という特別措置も取られた。それぞれの執筆分担は最終的に次のようになった。

第一章	大場義之
第二章	大場義之
第三章	大場義之
第四章	熊博毅
第五章	熊博毅
第六章	篠原茂一
第一節～第十節	篠原茂一
第十一節	熊博毅
第十二節	篠原茂一
第十三節	狩野吉清
第七章	狩野吉清

すでに述べたように、「通史編 上」は既刊の『七十年史』をベースとし、『七十年史』刊行後の資料収集ならびに調査活動の成果を踏まえながら書き改めるという

方針が立てられていた。こうしたことから、「通史編上」は『七十年史』編纂後、新たに発掘された資料や関係者からの聞き取りによる新事実を加え、『七十年史』の誤りを訂正し、欠を補ったところも少なくない(例えば、初代校主吉田一士の事跡や大正期の大学昇格運動―三笠山血盟事件、学徒出陣や学徒動員の実態、在日朝鮮人学生の受難、学生の文化・スポーツ活動など)。これらは「通史編上」の大きな成果といえるだろう。だが、その一方でいくつか反省すべき点も生じた。

時間的制約が最大の原因

まず、草稿執筆担当者が教員から事務職員に変更されたことであるが、草稿が期日までに間に合ったのはこの変更に因る所が大きいと言えるものの、専門委員会でもう少し論議を重ねる必要があったのではないかと思われる。

校閲に関しては当初、専門委員会の正・副委員長(横田・藺田両教授)が全体を通読したあと、専門委員が再

度、草稿をチェックし、その上で学長・理事長の最終確認を受けることになっていた。しかし、正・副委員長が多忙だった(後述するが、このころ藺田副委員長は「人物編」の原稿修正と「百年のあゆみ(図説)」の編集にも精力を傾注していた)ことと、四人で分担執筆するという事情から、目次の構成順に原稿をそろえることが難しかったため、第一章から校閲を始めたものの、計画どおりの手順で進めていては到底間に合わないことが判明し、第二章以下は最初から専門委員の校閲を受けることになった。また、執筆に時間がかかったこともあって、最終的に学長・理事長の校閲時間がほとんど取れなくなった。さらに、本来ならば校閲は印刷所に出稿する前の段階で受けるべきであるが、期日が迫っていることから、初校または再校の段階で校閲を受けることになってしまった。従って、校閲とは言っても、実際は歴史的事実や用字用語の誤りをチェックするといった範囲を出ないものであった。

また、原稿を一旦印刷所に渡したものの、新しく収集

した資料により新事実が明らかになった結果、大幅に加筆・修正しなければならない所も出てきた。こうしたいくつかの要因が積み重なって、当初に予定した本文一、〇〇〇ページという分量は最終的に一、一一二ページにまで増加した。

いずれにせよ、厳しい時間的制約の中で資料収集、執筆、校正と、いくつもの作業を並行して進めざるをえなかったというのが最も苦労した点であり、最大の問題点だったと言えるだろう。

「通史編 下」の草稿執筆

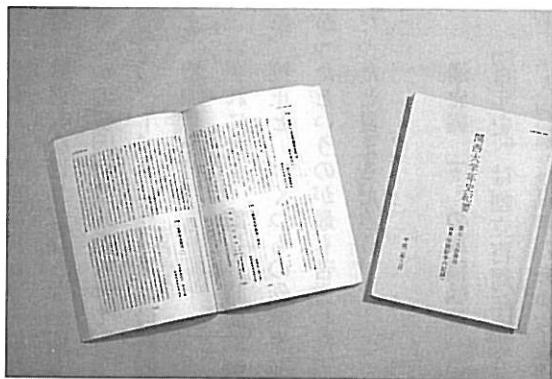
『百年史』は創立百周年記念式典までに「通史編上」「人物編」「百年のあゆみ（図説）」の三巻が刊行され、そのあと「通史編 下」「年表・索引編」「資料編」が順次、刊行された。そのため、順番から言えば、次は「人物編」「百年のあゆみ（図説）」の編纂経過を記述すべきであるが、「通史編」を一まとめに記した方がいろいろな事情も理解しやすいと思われるので、順番を入れ

替え、先に「通史編 下」の経緯を述べたい。

「通史編 下」の編纂がスタートしたのは昭和六十二年からである。この春、横田専門委員会委員長が退職し、代わって菌田副委員長が委員長に、神堀委員が副委員長に、それぞれ就任した。「通史編 下」の収録範囲は昭和三十一年から昭和六十一年までの三十年間で、関西大学百年の歴史から見れば三分の一の期間に過ぎないが、同時代史という性格上、生存者も多く、記述には困難が予想された。加えて「通史編 上」が『七十年史』のライトといった性格を持つのに引き換え、「通史編 下」は全くの書き下ろしとなるため、収録予定のうちのいくつかの事柄については記述だけでなく、発表の仕方を含めて配慮が必要とされた。

慎重を期した大学紛争の記述

専門委員会を取り扱いに苦慮したのは、やはり昭和十四年の大学紛争であった。戦後の教育史上、稀に見る重大事件の一つであり、全国的規模で吹き荒れたこの事



『関西大学年史紀要』第7・8合併号

件については、他大学の年史においても詳細な記述は見られなかった。そのため、専門委員会でも、この問題をどう取り上げるかということが議論の対象となった。最終的な結論としては、人名の記載等、個人の権益を損なわないよう配慮はしなければならないが、紛争の経過そ

のものは客観的に記述するということで意見が一致した。また、掲載にあたつては、まず『年史紀要』で草稿を発表し、学内外からの意見を聞いた上で『百年史』に収録するという二段階の方策をとることになった(平成二年に刊

行された『年史紀要 七・八合併号(特集 学園紛争の記録)』はこうした目的で編集されたため、従来の『年史紀要』とは大幅に内容が異なっている。学生が配付したビラを日付順に分類・整理して復刻したこの『年史紀要』に対しては、いくつかの新聞が大変な労作であるとともに、現代史の一面を照らす貴重な資料であると好意的に評価してくれた。しかし、それ以外の反応はほとんどなく、本学では大学紛争も、すでに過去のものになってしまっているという印象を受けた。『百年史』における大学紛争の記述は、その前史も含めて一一二ページに及んだが、これは他大学の年史と比較した場合、かなりボリュームの多いものとなっている。

草稿執筆にまつわるエピソード

当初、「通史編 下」の草稿は一年ぐらいで完成させる予定であったが、完全な書き下ろしということと大学の現代史ということから、実際に作業を始めてみると予想以上に時間がかかることがわかった。大学紛争につい

て意見を聞くために『年史紀要』を刊行する作業が加わったことも草稿の完成が遅れた原因の一つである。最終的に「通史編 下」の草稿執筆分担は次のようになった。なお、第十五章（第一高等学校・第一中学校・幼稚園のあゆみ）については、第一節を西川重幸第一高等学校教諭が、第二節を石川和代幼稚園長が担当した。

第八章 第一節～第七節 狩野吉清

第八章 第八節 狩野吉清、篠原茂一

第九章 第一節～第三節 熊 博毅

第九章 第四節 狩野吉清

第十章 第一節～第三節 熊 博毅

第十一章 第一節～第五節 熊 博毅

第十一章 第六節～第七節 熊 博毅、篠原茂一

第十二章 第一節～第五節 篠原茂一

第十二章 第十三章 第一節～第二節 篠原茂一

第十四章 第一節～第二節 熊 博毅、篠原茂一

第十五章 第一節 西川重幸

第十五章 第二節 石川和代

「通史編 下」の草稿が一応そろったのは平成三年のことで、三月から七月にかけて専門委員による校閲が行われた。そして各委員から指摘を受けた点については、修正作業を行った上で順次、印刷所に出稿した。原稿の字句や表記の統一に関しては主として熊が担当し、また、写真の選定・割り付けに関しては三宅邦弥課長補佐が担当した。さらに初校段階で園田専門委員会委員長、神堀副委員長が再度通読し、問題点を修正した。

「通史編 下」の執筆にあたって、それまでと大きく変わったのは、原稿をワープロで執筆した点である。これは「通史編 上」の草稿校閲の際、手書きの原稿では読みにくく、また、原稿の分量も膨大なものになったという反省に基づく。執筆者には一台ずつポータブルのワープロが用意されたが、キーボードに慣れるまではミスタッチの連続で、手書きを懐かしむ声も聞かれたが、推敲に便利な点など、慣れるに従ってワープロは必需品となっていた。ワープロを導入してよかったのは、原稿が読みやすいため、委員会での校閲作業がスムーズに進

んだことと、印刷を電算写植で行えたため、校正の手間と時間を短縮できたことである。文字データがフロッピーから直接印刷原稿に転換されるため、初校があがってくるまでの時間が短く、出稿（フロッピー渡し）から一カ月弱で約六百ページ分ほどの初校があがってきた。また、当初は字体が統一できるかどうか心配したが（『通史編 上』は活版で組んだ）、その点も問題はなかった。

資料収集について

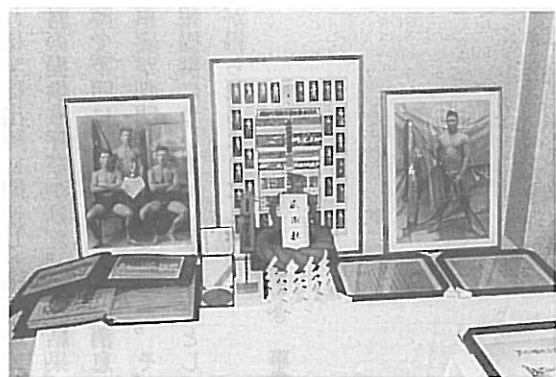
『百年史』、特に「通史編」は、従来から年史資料編集室で収集していた資料を使って編纂することになっていったが、資料を使いやすくするため、執筆に先だって再整理を行った。具体的には、大正十一年から昭和四十三年まで大学が発行した『関西大学学報』（刊行が連続しているのは戦前まで、戦後は断続的な発行となる）や学園紛争を契機に発刊され現在に至る『関西大学通信』、大学の官報ともいえる『廣報』、校友会の機関紙『関大』、学生が発行する新聞『関西大学新聞』（第一部）、『関西

大学新報』（第二部）、『関大スポーツ』などの記事を一枚ずつ台紙に貼り、分類コードと番号を与えてキャビネットに収納したのである。これによって必要とする記事を比較的簡単に取り出すことができるようになり、また、自宅執筆の際にも必要な部分のコピーを持ち帰って執筆することが可能となった。この切り貼り作業は、現在も年史資料収集のルーティンワークとして続いている。

さて、実際に草稿を執筆しはじめると、いくつかの分野で資料の不足していることが判明し、執筆と並行して資料収集も行わざるをえなくなった。こうした資料の不備を補う方策の一つとして、年史資料編集室は数多くの関係者に訪問や電話によるインタビューを行った。「通史編」と「人物編」の編纂にあたって新たに行ったインタビューは約百十件ほどにのぼった。その中には理事者や元学長、名誉教授といった、いわば大学における「歴史上の人物」以外に、ごく普通に卒業していった校友も多く含まれている。私自身について言えば、大正十年ごろの学生生活の様子を聞くために鹿児島まで出かけてい

ったことがある。南国では珍しく小雪の舞う中、こたつにあたりながら三時間ほど昔語りを聞いたのは懐かしい思い出である。また、学友会の雑誌や卒業名簿を調べてようやく連絡先を突き止め、勇んで電話をかけたその朝に、めざすご本人が亡くなっていたこともあった。そのめぐりあわせに、しばらくの間は声も出なかった。しかし、このように当事者たちから直接話を聞くことによって、昔の学園の様子や、さまざまなできごとの詳細を生きた生きたよみがえらせることができ、文献だけではなかなか得ることができない臨場感といったものを具体的に追体験することが原稿執筆の大きな支えになったのも事実である。このあたりが『現代史』のおもしろい所かもしれない。

なお、訪問してインタビューする場合には、原則としてテープレコーダーとカメラを持参して記録した。重要なものに関してはテープ起こしもしたが、話しことばと書きことばは根本的に異なるため、忠実に起こすことがかえって妨げとなる場合もあることから、大まかな意味



竹田繁七の遺品

をとらえることに主眼を置いた記録作りを心がけた（これらの記録は現在、未公開のままであるが、将来的には『年史紀要』等で発表することも考えられる）。電話による取材の場合は録音が不可能なので、聞いた内容を取材した者があとで記録にまとめることを原則とした（ただし、草稿の締め切りが近づいてくると、こうした作業に割く時間的余裕がなく、内容が残っていないものもある）。

ところで、インタビューを行う過程で思わぬできごと

がいくつかあった。一つは取材対象者ならびにその遺族からいろいろな資料の提供や寄贈を受けたことである。

大きなものとしては、冒頭にも記した創立者の一人である小倉久の遺品や、大正十二年に第五代学生相撲横綱となった竹田繁七の遺品（写真や横綱のミニチュア、賞状、練習用のまわしなど）、昭和七年のロサンゼルスオリンピック・三段跳びで銅メダルを獲得し、昭和三十九年の東京オリンピックで日本選手団長を務めた大島謙吉の遺品（楯、メダル、賞状、トロフィー、写真、書籍ほか）などがある。その他、小さな寄贈も何件かあった。

もう一つは矢口洪二最高裁判所長官（当時）が創立百周年記念式典に出席してくださったことである。長官の実父・矢口家治氏は昭和十六年から二十二年まで本学の専務理事を務め、その後、関西大学第一高等学校の初代校長（第一中学校校長兼務）となった人物である。その人となりや「人物編」に収録するため、年史資料編集室の担当者が長官をインタビューしたことが記念式典参列のきっかけとなった（ただし、長官の出席は私人とし

て）。

また、こうしたことと関連して、年史資料編集室がインタビューをしたり、調査を実施したもので、注目を集めそうな内容のものは記事にしてまとめ、校友会の機関紙『関大』に掲載してもらった。例えば、夏のころであれば学徒出陣に関連した内容の原稿をまとめ、同時に資料の提供も呼びかけた。その結果、写真の提供や学徒出陣で不明になっていた人々の消息など、いくつか新たな事実が判明したこともあった。そしてこうした資料や情報提供については再度、記事として掲載し、新たな情報が得られるようにした。

（以下、次号）

（くま ひろき 事業局出版部出版課主任）